

【出演者緊急募集】
長編映画『百万匹の猿の夢（仮題）』（企画開発中）
ヴィム・ヴェンダース奨学金 採択作品

募集期間：2026年1月21日まで

映像作家の森あらたと申します。現在、企画開発中のドキュメンタリー・フィクション（ドクフィクション）長編映画『百万匹の猿の夢（仮題）』に出演してくださる方を広く募集いたします。

本作は、17年前にひきこもりだった私個人が日本を飛び出し、ヨーロッパへ移住した実体験に基づいています。「もしあの時、日本を出ていなかったら存在したであろう“もう一人の自分”を探す」というプロットを軸に、個人の記憶と社会的な孤独を掘り下げる試みです。

本企画は、ドイツで新進気鋭の若手映像作家に毎年授与され、巨匠ヴィム・ヴェンダース監督自ら選ぶ「ヴィム・ヴェンダース奨学金」に選出されており、完成後はA級クラスの主要な国際映画祭への出品を目指しています。

1. 支援・助成

トキョーアーツアンドスペース 国内クリエーター制作交流プログラム
城崎アートセンター アーティスト・イン・レジデンス プログラム
NRW映画・メディア基金 ヴィム・ヴェンダース奨学金

2. 企画情報

監督・プロデューサー：森あらた
主演：太田信吾（ハイドロblast）
撮影監督：岸健太朗（K-zone）
共同プロデューサー：アンドレアス・ハートマン（OSSA FILM）
ステージ：企画開発中
フォーマット：長編映画、アートインスタレーション
完成予定：2028年頃

3. ログライン

「失われた世代=ロスト・ジェネレーション」に属する映像作家の私は、17年前に置き去りにした“もうひとりの自分”を探すため日本に帰国し、自分の過去を題材に映画を撮る。オーディションで出会った俳優・シンゴに自分を演じさせ、再現した当時ひきこもりだった部屋で「再演」を試みるなかで、物事は予想外の方向へ転がり始める。

4. シノプシス

遠くで響く爆撃の轟き。ここはウクライナとポーランド国境近くの町。難民が検問所へ押し寄せるはるか彼方で、ロシア軍の砲撃が空にこだましている。検問所前には各国の報道陣が集まり、その中でカメラを手に難民の一人へインタビューする、日本人の映像作家「私」。

—

日本の安倍元首相が銃弾に倒れた2022年の夏、私はある夕食会で、自分がその暗殺事件の犯人と同じ世代に属していることを知る。かつて高度経済成長に沸いた日本。しかし突然バブルが崩壊し、終わりの見えない経済停滞と就職氷河期に突入する。「失われた世代=ロスト・ジェネレーション」——社会から取り残され、希望の見えない時代を過ごした人々。日本を搖るがした凶悪犯罪人がとりわけ多いこの世代。

かつて“ひきこもり”——社会との関係を絶ち、部屋に閉じこもっていた——だった私は、日本を離れ、ヨーロッパへと移住し映像作家となる。けれども、もしあのとき日本を出ていなかったら今自分はどうなっていたのか？そんな疑問を胸に、日本に居続けたら存在しただろう“もうひとりのわたし”を探し出すため、そして自らの過去を題材にした映画をつくるべく、17年ぶりに故郷の土を踏む。

日本に戻った私は、映画制作のリサーチのため、催眠療法士の中野日出美が開催するグループセラピーに参加する。その中には「失われた世代」に属する、物静かで謎めいた俳優のシンゴや、登校拒否の娘を持つ由美子がいた。日出美の催眠の導きによって、潜在意識の奥底にある過去へと引き戻されていく由美子。深い無意識の中、6歳の少女となった由美子は、他の参加者が演じる統合失調症の母に無視され、涙を流す。そしていつしか、一人一人の心の傷と向き合い癒しを求める参加者たちは、擬似家族のようになっていく。

これから制作する映画の主人公、“もうひとりのわたし”を演じる人物を探すため、わたしは「失われた世代」の男女を集めてオーディションを開く。そして、グループセラピーで知り合った、由美子やシンゴにも参加してもらう。オーディションの最後、自分の番になったシンゴは、面談の終盤、過干渉な母に反発して不登校となり、ガラスを割っては自傷を繰り返し、引きこもっていた過去を打ち明ける。自分と通じる傷を抱えたシンゴにどこか近しさを感じる私。彼に、17年前の自分を演じてもらうことを決める。

17年前、世界から疎外された感覚に襲われ、部屋にひきこもって一歩も外に出なかった私。心の片隅に今も残るその異物感。それを断ち切るために、わたしは一つの実験を試みることにする。当時ひきこもっていた自分の部屋を、記憶を頼りに何もない撮影スタジオの中に、細部まで忠実に再現する——そこにシンゴを実際に住まわせ、生活そのものを始めてもらう——私が昔着ていた服を身につけたシンゴは、再現されたその部屋で、衣食住の全てを日常のように繰り返していく。私はその淡々とした生活の様子を、撮影監督の健太郎が持つカメラが映し出すモニター越しに見つめる。そこに映るシンゴの姿は、まるで過去の自分がもう一度その部屋に戻ってきたよう。

だが実験も佳境に差し掛かった頃、シンゴは私に問いかける。一体この「再演」に何の意味があるのか、他人の身体を通して、自己のトラウマを克服することは果たして可能なのか、と。そしてシンゴの、このプロジェクトに参加した本当の目的が明らかになった時、実験は思いもしなかった方向へと加速する。

5. 経歴：森あらた（監督／プロデューサー）

森あらたは、ベルリンと東京を拠点に活動する映画監督、映像編集者、アーティスト。学習院大学日本語日本文学科およびロンドンのセントラル・セント・マーティンズ美術大学ファインアート学科卒業。2022年にアジアン・カルチュラル・カウンシル個人フェローシップ、2025年にヴィム・ヴェンダース奨学金を受賞。

2021年には、中国の「一带一路」政策の影響下で変貌を遂げるシルクロードの都市風景をもとに、架空の都市を描いた実験ドキュメンタリー映画『A Million』を監督。第64回ライプツィヒ国際ドキュメンタリー映画祭に正式招待される。

2024年にはドイツ人監督アンドレアス・ハルトマンと長編ドキュメンタリー映画『蒸発 — Johatsu: Into Thin Air』（ドイツ文化庁助成・ARTE共同制作）を共同監督。日本における「蒸発」という現象をテーマに、夜逃げ屋や失踪者、残された家族の姿を追った同作は、テサロニキ国際ドキュメンタリー映画祭でのワールドプレミアを皮切りに、CPH:DOX、クラクフ、上海、ニッポン・コネクションなど世界40以上の映画祭で上映。ドイツ最大のミュンヘン国際ドキュメンタリー映画祭では最高賞であるヴィクター賞を受賞し、ドイツ、ロンドン、香港等で劇場公開。2026年3月には、ユーロスペースをはじめとする日本全国順次公開予定。

また、写真家ラウリアン・ジニトイウとともに「another:」を共同設立。ビャルケ・インゲルス、ジョシュア・レイマス、塩田千春ら建築家・アーティストとコラボレーションを行う。2023年の中編映画『veins』では、ポルトガルの採石場からニューヨーク・ワールドトレードセンター跡地までの大理石の旅を描き、ADFF:NY（建築デザイン映画祭ニューヨーク）でプレミア上映。2025年には、インゲルスとの新たなコラボレーション作品をヴェネチア建築ビエンナーレで発表。

エディター・編集コンサルタントとしても多くの作品に携わり、レモハン・ジェレマイア・モセセ監督『Ancestral Visions of the Future』（ベルリン国際映画祭2025）や『Mother, I Am Suffocating. This Is My Last Film About You』（ベルリン国際映画祭2019）などを担当。また、WOWOW制作のドキュメンタリー・シリーズ『WHO I AM』では国際エミー賞にノミネート。

さらに、NHKの大型ドキュメンタリー番組でもディレクターとして活動し、ウクライナ国境やイランなど紛争地帯における難民危機の取材を行う。

公式ホームページ：<https://www.aratamori.com/?lang=ja>

6. 出演募集

対象年齢	40歳～55歳程度。いわゆるロスジェネ世代の方。
性別	不問
報酬	企画開発中のため応相談（個別にご連絡いたします）
出演範囲	以下①、または①+②の両方（応募時にご希望をお伝えください）
募集期間	2026年1月21日まで（延長の可能性あり）

出演シーンの詳細

- ① オーディションシーン（「私」を演じる役者役） 「もう一人の自分」を探すためのオーディションという設定の劇中シーンです。森あらた監督自身の過去のトラウマを演じていただくほか、ドキュメンタリーパートとして、ご自身の過去や「孤独」「疎外感」についてお話しいただきます。
- ② 集団サイコセラピー・シーン（※希望者のみ） 心理療法士・中野日出美先生の指導のもと、実際の集団セラピーに、参加者の一人として参加していただきます。今回撮影を行うサイコセラピーは、主に催眠療法と「サイコドラマ」を組み合わせたものです。

催眠療法とは：深いリラックス状態（催眠状態）に導くことで、「潜在意識（心の奥底）」に直接アプローチする医学的に確立された精神療法。過去のトラウマや抑圧された感情を安全に呼び起こし、心の傷の癒やしを促します。

サイコドラマ（心理劇）とは：精神科医ヤコブ・モレノによって創始された、即興劇の形式を用いる集団精神療法です。単に過去を言葉で「話す」のではなく、実際の場面を「演じる」ことで、当時の感情を再体験し、客観的な視点から自己理解を深めます。参加者の一人を「主役」として選び、家族の一員や友人など、主役の人生に登場する重要な人物を他の参加者が交代で演じ合います。

このセラピー・シーンでは、単なる「演技」を超えた、参加者お一人おひとりのリアルなトラウマ体験の「再演」や感情を記録します。したがって、ドキュメンタリーやフィクションの垣根を越える意欲的な挑戦で、本作の1／3程度の尺を占める非常に重要なパートとなります。

中野日出美先生プロフィール：<https://jpcs.or.jp/aboutus/directors/chief-director/>
サイコドラマについて：<https://www.terada-medical.com/column/psycho-drama/>

7. 撮影スケジュール（予定）

2026年2～3月中

- オーディションシーンのみ：1～2時間程度
- セラピー・シーンも含む場合：上記に加え、4～8日程度（日、月曜）

8. 応募方法

今回の募集では、本作の内容や方向性に適した方かどうかを判断するため、事前に動画のご提出をお願いしております。お手数をおかけしますが、下記メールアドレス宛に必要事項を添えて「オーディションテープ（動画）」を送付してください。

- 送付先： info@aratamori.com
- 形式： VimeoやYouTube（限定公開）のリンク、またはファイル転送サービス等

【オーディションテープの内容】

※スマートフォンやWebカメラでの撮影でも構いません。

簡単な自己紹介：お名前・経歴など

ご自身の過去と現在：ご自身の過去についてやトラウマ体験。また、現在の心の悩みや、「孤独」についてどう思うか。（セラピー参加希望の方は、サイコドラマを通じて再現してみたい自身の体験があればお話しください）

実演：劇中のオーディションシーン「音のない叫び」

- **設定：** 小学校時代、唯一の友達だった田中君を交通事故で亡くした、この作品の語り手である映像作家の「私」。葬式で周りが号泣する中、一人だけ涙を流せず感情を押し殺していた。数十年後、その「私」を演じる役者を選ぶためのオーディションという設定で、「私」の代わりに当時の抑圧された感情を爆発させるというシーンです。
- **演技課題：** 以下の監督（私）の言葉に続いて演技をしてください。

監督（私）： 「それでは、オーディションの開始です。皆さんには、私の子供時代のワンシーンを演じてもらいます。舞台は、交通事故で亡くなった幼馴染の田中くんの葬式です。田中くんは、私にとって唯一の友達だった。他には誰もいなかった。葬式で、周りの同級生たちは皆、泣いている。だが私は、涙を流せない。ただ、棺の中の田中くんを見つめている。

このシーンの『私』を演じてください。そして、当時泣けなかった私にかわり、感情を表にして思い切り叫んでください。ただ、声は出さずに。つまり、『音のない叫び』をしてください」

本作に共鳴してくださる方との出会いを、楽しみにしております。皆さまからの幅広いご応募を心よりお待ちしております。